

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 29 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520172

研究課題名(和文)ドイツ・ニューシネマにおける「文学的」映画の研究

研究課題名(英文)Study of Film and Literature in the New German Cinema

研究代表者

渋谷 哲也 (Shibutani, Tetsuya)

東京国際大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：90438789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツのニューシネマにおけるラディカルな映像美学とメディア批判を实践した映画監督たち、とりわけストロープ＝ユイレとファスビンダーの映画における文学的要素の活用方法を考察した。とりわけ彼らの脚色映画を取り上げ、歴史的な原作テキストから20世紀後半のアクチュアルな政治性を掘り起こす手法、そして文学性を強調する演出法が映像メディアへの批判的な意識を喚起する技法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The radical method of literarization the film by Straub=Huillet and R.W. Fassbinder was analyzed based on their cinematic adaptations of literary works. By alienating the current political rule aspects emphasized by the historikal text. It is important for the film and media studies that the litetarization is based on the essential film aesthetics of the New German Cinemas.

研究分野：ドイツ映画

キーワード：ニューシネマ ドイツ

1. 研究開始当初の背景

映像は国籍や文化圏の枠に囚われないグローバルな受容を前提とするが、映像はそれぞれの文化によって異なる意味づけをなされることも事実である。その意味で映像に言語文化と密接に結びついている。

そのため今日の映画研究では、映画における言語の位置づけの見直しは重要度を増している。映画の音声や言語は映像表現の補助的要因ではないというだけでなく、例えばドイツ語圏におけるブレヒトの異化や叙事演劇の理論はハリウッド的な映画のイリュージョニズムと現状肯定的イデオロギーへの批判となりうる。とりわけ 60 年代以降のニューシネマにおいて、ブレヒトの提唱した演劇の「文学化 (Literarisierung)」は、映画の文学化という形で応用されてきた。

これまでの映画研究が英語圏やフランス語圏で盛んだった事情もあり、ドイツ映画における理論的インパクトを考察する機会は極めて限定されてきた。その一方で「ニュージャーマンシネマ」と呼ばれた 1960 - 70 年代の西ドイツの映画群はその独自の美学によって注目されてきたことも見逃せない。とりわけジャン＝マリー・ストロープ/ダニエル・ユイレやライナー・ヴェルナー・ファスピンダー等の映画は、文学や演劇の伝統との結び付きが強く、しかも文学テキストに依拠する独自の映画様式を持つ。とはいえこうしたドイツ映画研究はこれまでほとんど日本に紹介されていない。

2. 研究の目的

映画における言語 (テキスト) の機能に注目しつつ、現代の映画美学のあり方を検証することが主たる目的である。いわゆる「現代映画」において、言語は映像から独立した位相を獲得する。台詞や音声は映像のリアリズムを補強するのではなく、むしろ映画のイリュージョニズムまたはスペクタクル性への批判や、映像文化の普遍性を鋭く問い直す要因となりうる。こうした映像批判を創造的に展開した戦後ドイツのニューシネマ作品を取り上げ、映画を映像・音声・言語 (テキスト) の 3 要素で考察することにより、映画を言語文化との相互関係において捉えつつ、さらに現代の映画メディアの美的・社会批判的意義について考察してゆく。

3. 研究の方法

これまでストロープ＝ユイレやファスピンダーに関して私自身の研究で積み重ねてきた成果を総括的な視野で整理し、さらに掘り下げるべき点を明確化する。初年度にはまずストロープ＝ユイレについての研究成果を見直し、追加の資料収集と作品分析を進め、包括的なストロープ＝ユイレの作家論を構築する。さらにファスピンダーの研究成果についても総括し、ファスピンダーについての

論考を著作にまとめる準備をする。その際、他のニュージャーマンシネマの映画作家の類似する作品と比較対照を行い、戦後ドイツのラディカルな映画美学の多面的な実相を纏める。

また日本に紹介されることが稀なドイツ映画について本研究の枠内で重要と思われるマイナーな作品を日本で上映する活動も行ってゆく。今回はインデペンデントで映画を作り続けてきたレナーテ・ザミを日本に招待し、上映と討論を行う。

4. 研究成果

平成 24 年度にはドイツのニューシネマについて、とりわけファスピンダーとストロープ＝ユイレの作品における文学脚色の手法を考察した。その成果はアテネフランセ文化センターでの映画上映と併せた講演や討論会によって発表した。ここではファスピンダーによる既存のテキスト使用が、一見原文に極めて忠実でありながら、映像との不一致や距離化された演出によって独自のテーマ性を帯びるという手法を明らかにした。また言語要素と映像との異化を重視するハンス＝ユルゲン・ジーバーベルクのドイツ 3 部作や、ヴェルナー・ヘルツォークのドキュメンタリー作品も考察し、ニュージャーマンシネマの美学をできる限り多角的に考察することに努めた。

平成 25 年度には日本独文学会でのドイツの 68 年世代の作家の再評価を試みるシンポジウムを開催し、その中でファスピンダーの現代における再評価の可能性を探った。既存の文学テキスト、社会問題、身体性など多様な引用の織物としてポストモダン的な美学の側面を見せつつ、根底にモダニズムの鋭い批判性を備えたファスピンダー独自の美学を明らかにし、そのスタイルがむしろ 21 世紀においてようやく客観的に評価しうる土壌を得たことを明らかにした。また研究論文としてファスピンダーに少なからぬ影響を与えたストロープ＝ユイレの文学脚色の手法について発表している。

また 26 年 3 月にはドイツの知られざる映画監督レナーテ・ザミを招待し、彼女の代表作上映とレクチャー及び討論会を開催した。彼女の映画スタイルはストロープ＝ユイレと同様に既存のテキストに依拠しつつ、以下の手法で映像・音声・テキストの対位法を実現している。それは単なる美的な成果であるだけでなく、彼女が生きた 60 - 70 年代欧州の政治的状況とも密接に結びついていることを明らかにすることができた。ただしそれを文章化して発表するのは今後の課題である。

平成 26 年度はストロープ＝ユイレの映画について集中的に考察することを目標とし、東京と神戸で各 4 回ずつ映画上映と講演および質疑応答の会を催し、ストロープ＝ユイレの様々な映画を実際に視聴しつつ詳細な分

析考察を行う機会とした。難解な作家として知られるストロープ=ユイレだが、そのユニークな撮影・演出・演技は、実はそれぞれが基盤にした文学作品やオペラ作品を詳細に読み解いていくと、テキストの内容と演出とが密接に結びついていることが明らかになる。こうした文学研究・音楽研究と映画研究を結びつける考察は極めて意義深く、しかも彼らの映像や音声の使用法は単に理論的に説明しきれない創造性を感じさせる部分がある。こうした多面的なアプローチによる映画分析の可能性を見出しえたのが大きな成果だった。

本来は 26 年度内にこれまでのドイツ映画研究の成果を単著として発表することを目標としていたが、その編集作業に予想外の時間を必要としたため、平成 27 年に『ドイツ映画零年』として出版した。ここではこの 3 年間に考察したファスピンダーやニュージャーマンシネマだけでなく、平成 21 - 23 年度の科研費によるドイツ移民映画研究の成果、およびそれ以前に行ってきたれに・リーフェンシュタール論も併せて掲載し、これからの私の研究のさらに進めるための中間総括的な論集とした。ここではドイツ映画史を縦横に行き来することで、個別の映画を幅広い文脈から再検証するための重要な示唆を与える論集となったと思われる。

またヨーロッパ映画における移民・難民・辺境・ボーダーなどをテーマとする単行本の編集と執筆にも参加し、本研究の成果を作家論や作品紹介などに盛り込んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

渋谷哲也、ドイツ連邦共和国の「移民映画」1960 - 80 年代の推移、学習院大大学研究論集第 17 号、査読あり 2013、23 - 44

渋谷哲也、ストロープ=ユイレにおける脚色映画のラディカルなスタイル、学習院大大学研究論集第 18 号、査読あり、2014、1 - 25

渋谷哲也、『ベルリン・アレクサンダー広場』時代を超越する作家と作品についての覚書、上智大学映像ゼミナール 2013、査読なし、2014、14 - 28

渋谷哲也、作家映画と脚色 ライナー・ヴェルナー・ファスピンダーにおける文学映画化について、応用社会学研究 第 24 号、東京国際大学大学院社会学研究科、査読なし、2014、1 15

渋谷哲也、テキスト・歴史・身体の引用 ライナー・ヴェルナー・ファスピンダーのオリジナリティ、日本独文学会研究叢書 106

号、査読なし、2014、49 - 63

〔学会発表〕(計 13 件)

渋谷哲也、ニュー・ジャーマン・シネマと文学(テキスト)の関係を探る、『あやつり糸の世界』記念特別講義、2013 年 1 月 28 日、アテネフランセ文化センター

渋谷哲也、アルスラン、ファスピンダードイツ映画の異質なまなざし、「Select CINE TECTONICS-19 トーマス・アルスラン、R・W・ファスピンダー」(招待講演) 2013 年 5 月 6 日、山口情報芸術センター(YCAM)

渋谷哲也、テキスト・歴史・身体の引用 ライナー・ヴェルナー・ファスピンダーのオリジナリティ、日本独文学会秋季研究発表会、2013 年 9 月 28 日、北海道大学

渋谷哲也、映画の国の異邦人 カフカの『失踪者』と『階級関係』、シリーズ企画、ストロープ=ユイレ作品上映+講演、2014 年 4 月 25 日、エスパス・ビブリオ

渋谷哲也、ニュージャーマンシネマと文学 映像とテキストの新たな関係性を探る、単独企画、2014 年 5 月 10 日、神戸映画資料館

渋谷哲也、『モーゼとアロン』言葉とイメージの対立をめぐる ホルガー・マインスへの献辞の謎、シリーズ企画、ストロープ=ユイレ作品上映+講演、2014 年 7 月 19 日、エスパス・ビブリオ

渋谷哲也、文学映画化の諸相：チェザレ・パヴェーゼの場合、単独企画、2014 年 8 月 16 日、神戸映画資料館

渋谷哲也、バッハ映画：ストロープ=ユイレのファミリー・メロドラマ、シリーズ企画、ストロープ=ユイレ作品上映+講演、2014 年 11 月 1 日、エスパス・ビブリオ

渋谷哲也、カフカを読むストロープ(とユイレ) 単独企画、2014 年 12 月 20 日、神戸映画資料館

渋谷哲也、ストロープ=ユイレからストロープへ、シリーズ企画、ストロープ=ユイレ作品上映+講演、2015 年 3 月 14 日、エスパス・ビブリオ

渋谷哲也、大田美佐子、ストロープ=ユイレ、プレヒト、ワイマール期の音楽劇、単独企画、2015 年 3 月 28 日、神戸映画資料館

渋谷哲也、ストロープ=ユイレ『歴史の授業』移動する(トラヴェリング)プレヒト、シリーズ企画、ストロープ=ユイレ作品上映

+ 講演、2015年6月27日、エスパス・ビブ
リオ

渋谷哲也、<暴力の支配するところ>にお
ける映画 ストーリーブ=ユイレにおける反
ファシズム映画試論、シリーズ企画、ストロ
ーブ=ユイレ作品上映+講演、2015年11月
28日、エスパス・ビブリオ

〔図書〕(計2件)

渋谷哲也、共和国、ドイツ映画零年、2015、
304

野崎歓、渋谷哲也、夏目美雪、金子遊他、
河出書房新社、国境を越える現代ヨーロッパ
映画 250、2015、328

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渋谷 哲也 (SHIBUTANI, Tetsuya)

東京国際大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：90438789

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：